

対照言語行動学研究会 (JACSLA) 第 20 回記念大会 研究発表 概要

2022. 10. 8 開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	「が」の「とりたて助詞」的性格
著者名 (所属)	菊地 康人 (国学院大学)
連絡先 Eメール	kikuchi@kokugakuin.ac.jp
<p>論文内容 〈解答提示〉(総記/排他/強調)のガのとりたて的性格はすでに留意されているが(野田 1996, 菊地 1997:106), ここでは少し変わった「ハがガに代わったケース」を中心に見る。</p> <p>ハの文の多くは「名詞+格助詞 (またはノ)」の主題化として説けるが, そうでないものもある。「このにおいは, ガスが漏れてるにちがいない。」(三上 1960:95), 「ポテトチップスは太る。」のようなもので, これらのハは, 格助詞やノに還元できない。それでもこれらの文が成立するのは, 「TはC」のCが, Tについての情報として成り立つ性質の内容だからである(菊地 2001:8-9)。具体的には, この2例のCはそれぞれ「Tの背景を解析する」「Tの結果・展開の成り行きを述べる」内容である。格助詞やノに還元できないハの文が成立するには, このように, Cが, Tについての情報として機能する内容でなければならず, それは幾つかの類型にほぼ限られる。菊地(1995:54-58)は, このようなハの文を「〈特定類型〉の「は」構文」と呼び, その下位類として〈背景解析型〉〈結果・展開型〉(上例はそれぞれこれらの例)等を立てた(他にも幾つかある)。いずれもトピックマーカのハでこそ成り立つ(格やノの関係によらない)文である。丸山(1998:129), 金谷(2002:133-134)の「こんにゃく文」(「こんにゃくは太らない」)は, 菊地の〈結果・展開型〉である。こう見てくると, 「たくさん食べても太らないものってあるかな?」「こんにゃくが太らない。」のガは, 格を示すがではなく, 本来ハでこそ成り立つはずの「こんにゃくは太らない。」のハがガになったものと見られる。このように〈特定類型〉の「は」構文のハがガになったものが, ハ→ガの1つのケースである。</p> <p>一方, 「このタイプが, 客がよく買う。」のようなガは, 本来他の格助詞(本例ならヲ)がハになり, ハがさらにガになったものと見られ, これがハ→ガの第2のケースである。この種のガには野田(1996:276-277)も天野(2001:25)も注目しており(ハ→ガとまでは見ていない), 野田は, 格助詞性を欠くとりたて助詞と見るが, 天野は, 本例なら「客がよく買う→人気がある」のようにガの後が性質を表すことがこの文の成立の条件であり, 格助詞性もあると見る。本来が他の格なだけに, 〈特定類型〉の場合よりもハ→ガが起こるには条件が付くわけである。</p> <p>どちらのケースでも〈解答提示〉が成立しやすく, 今の2例もその例だが, 「ポテトチップスって, ついたたくさん食べちゃうね。このポテトチップスが太るんだよね。」「直前になって, 公開が待ったがかかった。」のように〈中立叙述〉の場合もある(菊地 1996)。</p> <p>以上いずれも, 「ハとガはある程度フレキシブルに行き来できる」意識と, 「ハ→ガとすることで, 〈解答提示〉性/〈中立叙述〉性を出したい」という動機からのものと見られる。〈解答提示〉は, いわば選んで押し出すような機能で, まさにとりたて(的)である(第2のケースには天野を踏まえて「的」を付しておきたい)。一方, ハ→ガでも〈中立叙述〉だと, とりたて感薄い。この場合は, 格助詞性は欠くが, 普通の意味でのとりたて性をもつわけでもなく, 〈トピック性を出さない〉(非トピックとして示す)機能だと見られる。ハがあってこそその, それと張り合い, ハの性質をキャンセルする機能なので, 広い意味ではとりたての一種とも見られよう。</p> <p>参考文献 天野みどり 2001「格助詞」『国文学』46-12, 学燈社/金谷武洋 2002『日本語に主語はいらない』講談社/菊地康人 1995「は」構文の概観」益岡他編『日本語の主題ととりたて』くろしお出版/菊地 1996「「XがYがZ」文の整理」『東京大学留学生センター紀要』6/菊地 1997「「が」の用法の概観」川端・仁田編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房/菊地 2001「(併)と(意味)を結ぶ(文法)を追う魅力」『国文学』46-2, 学燈社/野田尚史 1996「「は」と「が」」くろしお出版/丸山直子 1998「話し言葉の諸相」堂下他編『音声による人間と機械の対話』オーム社/三上 章 1960『象ノ鼻ガ長イ』くろしお出版</p>	

